

動詞時制についての一考察

山口 巖

I. はじめに

§1 筆者は以前に言語における時間についていろいろと考えることがあり、その手がかりを求めて考察を行ったことがある。言語と時間の関係については未だ分からないことの方が多く、答えを見いだせないでいるが、これまで述べてきたことの骨子は、次のように纏めることができよう。

1. 最近の内容的類型学の研究と、それに伴う印欧語比較文法が新しい展開をみるまでは言語における時制の問題は、専ら言語とは独立に客観的に存在する時間が言語においてどのように反映するに至ったかという観点から取り扱われていた。
2. 内容的類型学の言語学に及ぼした影響は真に目覚ましいものがあり、これによって印欧語の名詞類の格の問題、数の問題、あるいは動詞の語彙的意義の問題等の研究に種々の知見がもたらされた。その結果、印欧祖語が活格言語の段階 active language stage にあったことは殆ど確実なものと考えられるに至った。
3. 動詞の諸カテゴリーに関する議論も従来すでにさまざまに研究され、精密化されてきた印欧語の状態に新しい解釈が齎らされるようになった。
4. それにも拘わらず、現在に至るも時間そのものの客観的存在についての根本的疑念については未だ意識に上っていないのが現状であると思われる。この意味で言えば、現状は第1項に述べたところから理論的にはさほど進展してはいないといわざるを得ない。

§2 一方例えばヴィルヘルム・フォン・フンボルトが夙に指摘したように、言語には万人の承認する伝達の機能と並んでより根本的な認識の機能がある。フンボルトはこれについて次のようにいう。

言語の創造は人間の内的な必要によって条件付けられている。言語は人々のコミュニケーションという外的な手段であるだけではなく、人間の本性そのものの中に根を持ち、人間がこのことを達成できるのは、個人的な思惟を社会的な思惟と一致させたときだけなのである [48, pp.23-24]。

§3 更に彼は認識と言語の関係について次のようにも言う。

主観(体)的活動は、思考において、客観(体)を構成する。というのは、どのような種類の表^{スブイェクティーフ}象^{フォルシュテルン}であろうとも、表象は、すでに現存している何らかの対象を純粹に受動的に静観するものに過ぎない、などとは、とても考えられないからである。感官の活動は、精神の営む内面的な行為と総合的に結びつかなくてはならず、しかも、そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう。更にこの表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく。この場合にこそ言語が不可欠なのである。そのわけは、言語において、精神の働こうとする力が唇を破って解放される道が開かれることになり、この精神の力の生み出したものは、自分の耳へと戻ってゆくことになるからである。このようにして、表象は現実の客観性へと移行してゆくのであるが、そうだからと言って、主観性から切り離されてしまうことにはならない。このような過程を成し遂げることができるのは、言語だけである (第十四節)[47, pp.243-244][51, p.61]。

§4 ここに述べられていることを学生に説明するために、筆者は次のように記した。

フンボルトは、人間はたとえば目の前に「机」があるのを見て、それをそのまま受動的に受け入れて机の概念(表象)を作るのではない、とっています。ものを見る目、聞く耳、さわる触感などは、精神の活動と一体になって働き、たとえば「ツクエ」という音と結びつけて、はじめて概念を自ら作り上げるのだ、というのです。たとえばスペク

トルのような連続した色のばあい、どこからどこまでが「赤」なのか、あるいは「青」なのかを客観的に決めることはできません。

それぞれの民族は自分の国の「赤」に当る言葉と、現実のスペクトルとを対応させて、色の連続に切れ目を入れるのです。ですから言語によって必ずしも切れ目が一致するとは限りません。日本語の場合は昔は「青」と「緑」の間に切れ目を入れず、ひっくるめて「青」という言葉で示していました。しかし一旦こうした「精神の内的作用」と結びついた視覚によって、たとえば「青」という言葉に対応する概念が確立しますと、今度はそれは、あたかも言語主体とは関係のないもののように、受取られることになります。すなわち、「そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう」のです。

そうすると、たとえば「青」という概念は、現実に見るものがこの概念に当てはまるかどうかという物差になります。「青」であるとか「青」ではないとかいうように、これを基に現実にあるものを、主観的に判断をするようになります。「この表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく」というのはこのような意味だと思われます。

つまり、フンボルトは、ここでは言語というものは、客観世界をそのまま写し取るものではなく、言語毎に客観世界をいわば「切り取って」、それぞれに異なる「客観世界」を作り出すのだ、といっているのです。そしてこれが「主観^{スブイエクティーフ}(体)的活動は、思考において、客観^{オブジェクト・ビルテン}(体)を構成する」ということの意味なのだ、といっているのです。

さらにいえば、例えばここに「この道の所々にはほぼ一定の距離をおいて椅子が配置されていて、道を行く人が歩き疲れるといつでも腰を下ろして足を休めることができる」というような文章があるとしましょう。この文章は誰でも理解でき、直ぐに情景を想像することができます。しかし本当にそうでしょうか。例えば今ここに木で作られた椅子があるとします。しばらく行くと今度は岩を削って座れるようにした椅子があります。さらに行けば今度は鉄製の椅子が見えてきます。大理石できているものもあるかも知れません。しかし客観的に存在しているものは、「木」であり、「岩」であり、「鉄」であり、「大理石」であるに過ぎません。「椅子」なるものは客観的には存在してはいないのです。それにもかかわらず私たちは先ほどの文章から、あたかも「椅子」が客観的

に存在していると思ってしまう。これはどうしてでしょうか。

実は「椅子」というのは客観的な存在に対して与えられた名前ではなく、その用途ないしは機能に対して与えられたものにすぎないのです。(機能が実在するものでない以上、これに対する名前である「椅子」なるものが実在するはずはありません。)言い換えれば、これらの実在する「木の塊」や「鉄」や「岩」などは機能の点で等質なものと観念され、したがってあたかも「椅子」が客観世界に実在しているかのように思いこみ、その結果先ほどの文章の意味が理解されることになるのです。従って熊であれ兎であれ、機能を理解できないものには、それらの「椅子」はすべて相異なるものとしか認識できないでしょう。

このようなものは言語に関して無数にあります。私たちが客観世界であると信じているものは実は精神活動の結果そう信じているに過ぎないものなのです。従って極端に言えば、私たちを取り巻いている「客観」なるものは決して同一ではなく、言語が異なる毎に異なっているということもできます。実はこのような考え方は、最近問題にされてきている環境言語学の理論的な鍵となるものだと、考えられます [51, p.61 & seq.]。

大方の学生はこの説明を完全に理解することができたと思われる。ある学生はレポートに「これまで物があって名前があるのだと思っていたが、名前があるから物があるのだということがよく分かった」と書いてきている。

§5 もしも客観的に存在すると思われた周囲の世界ですらその存在が専ら言語に依存しているとするならば、時間のみが言語から独立して存在するということには、深い疑念を呈しない訳にはいかないであろう。

比較言語学者も言語特に印欧語族の言語がそのそもそもの始めから時間を表していたとは考えていなかった。例えば著名な印欧語比較言語学者のヒルトも、時間に関して次のように述べている。

Es gab im Idg. drei verschiedene “verbal” stämmen, den Präsens-, den Aorist- und den Perfektstamm. Diese haben anfänglich nicht die Zeit, sondern etwas anderes bezeichnet..... [10, III, p.118]

しかし彼はこれを概念的に考えていたに過ぎず、言語における時間について、そ

れがどういう機序によって生じてきたのか、また時間の発生以前はそれは何であったかについては語る事が無い。もちろんこれはヒルトの罪ではなく、当時の言語研究の水準に帰せられるものに違いない。このことは現在においても本質的に変わってはいない。ただ近年における比較言語学の発展と、これに大きな影響を与えた内容的類型学の進展によって、この問題が意識に上りつつあることは確かである。

§6 以上のような観点から著者は「時間」について、特にその言語におけるあらわれについて考えようとしたことがある。これは冒頭に述べたように、少なくとも現在の所未完に終わる以外にはない問題である。したがって時間そのものも、印欧語の古層においては未だ存在してはいなかったのではないかという推測で終わる他はなかった [53, p.290 & seq.]。

このような事情は現在も変わってはいない。従ってここで述べようとしているのは、主として比較言語学者の間で大凡確実とされていることがらを、再度時間の観点から並べ直してみようと言うのがその趣旨に外ならない。

II. 人称語尾について

§7 印欧語の動詞の語尾については所謂一次語尾と二次語尾を区別するが、二次語尾がより古いものであることは既に殆ど定説になっている [26, p.60-61]。イヴァーノフもトカラ B 語において所謂一次語尾が知られていないことを挙げ「アナトリア諸語やトカラ諸語が複数形において一次語尾と二次語尾の区別が未だ形成されていなかった時代の再構成を可能にするという想定が可能であると思われる」とし、また「ケルト諸語においては一次語尾と二次語尾の時制的対立が欠如している」と指摘している [29, p.40]。ウォトキンスは所謂一次語尾に *-mi*, **-si*, **-ti* おける **-i* を *hic et nunc* を表すものであるとしたが [25, p.112]、これはおそらくより感性的なものであらうと考えられる [53, p.335 & seq.]。

要素 **-i* の機能がどのようなものであれ、所謂二次語尾からこの要素の付加によって一次語尾が生成されたとすれば、それが必要とされたからに違いがないと思われる。もしそうとするならば、これは *hic et nunc* 乃至行為のより感性的な強調の何れであるにせよ、そのような強調を必要とさせたものは、それ以前の二次語尾によって表現されたものから区別する必要が生じたからに違いない。そうでなければ

ば意味的に無標的 *merkmallos* であるべき現在が標識をとり、意味的に有標的であるべき過去形が却って形式的に無標であることの説明が難しいであろう。

もしこのような推測が正しいとすれば、そのような必要はそれまで時制の観念とは無関係に、行為と密接に関係する対象のみを表示していた人称語尾が、行為が今ここに生起しつつあることを卓立する必要が生じたためではなかろうか。

§8 この点に関連してイヴァーノフは次のように述べている。

共時的な観点からすれば、ヴェーダの言語においても、「ガーサ」、「アヴェスタ」の言語においても、(二次語尾を取り、*augmentum* を持たない) *injunctivum* の諸形は過去時の面でも (*Veda réjad bhūmīḥ* 「大地が震えた」, RV IV, 17,2; Av. *kə mā tašat*, 「誰が私を創ったのか」, Y. 29, I), また法の面でも (*Veda śúṣṇam pári pradakṣiṇíd vísvāyave ní śísṇathah* 「シュシナはその右の手によってすべての生けるもののために滅ぼせ」, RV X, 22,14; AV *āxsō vanjhəuš ašā ištīm manəṇho* 「私の良き考えの力を見よ」) 用いられ、同時に一般的な現在時としても用いられた (Kurylowicz 1925; 1964, p.146; Renou 1928; Barrow 1976, p.279, 280; Hoffmann 1967)。従って *injunctivum* には後に *imperfectum*, *aoristus*, 及びその他一連の特殊なカテゴリーに発展する古い印欧語の動詞の形の残滓が保存されているという推定が可能となる (Иванов-Топоров 1960, p.115; Иванов 1965, p.136, 137; [29, p.34])。

§9 メシチャーノフは名著『動詞』において、ネネツ語の述語が 1・2 人称において名詞、形容詞、動詞に関わりなく述語の内容に密接に関わる対象の接辞を付加するが、それ以外 (3 人称) においては接辞をつけないことを示している [35, p.45]。

<i>хасава-м</i>	私は男だ。	<i>нгарука-м</i>	私は大きい。	<i>ну-м</i>	私は立っている。
<i>хасава-н</i>	お前は男だ。	<i>нгарука-н</i>	お前は大きい。	<i>ну-н</i>	お前は立っている。
<i>хасава</i>	彼は男だ。	<i>нгарука</i>	彼は大きい。	<i>ну</i>	彼は立っている。

名詞においてもこのような「人称語尾」がつくとすれば、これは現代語の感覚でいうところの「人称語尾」というよりは、これを述語の標識であると考えの方がむしろ妥当であろう。後に見るようにメシチャーノフもまたそう考えているようである。

メシチャニーノフはこの形をアオリストと呼んでいるが、これはアオリスト *α-όριστος* の原義「無限態」によったものであろう。彼はこれについて「アオリストはいかなる時間の標識も持たないが、過去形は独自の標識を持ち、述語に立つ動詞あるいは名詞は人称の標識と結びついてひとつの動詞語尾を形成する」(ibid. p.46)と述べている。彼によれば過去形は次のようになる。

<i>нгарука-мзь</i>	私は大きかった。	<i>сюрби-мзь</i>	私は走った
<i>нгарука-нась</i>	お前は大きかった。	<i>сюрби-нась</i>	お前は走った。
<i>нгарука-сь</i>	彼は大きかった。	<i>сюрби-сь</i>	彼は走った。

§10 メシチャニーノフは、彼がここでアオリストあるいは過去といているのは、真正な時制のカテゴリーではない、と述べている。即ち

このネネツ語においては動詞のみでなく名詞も述語の位置においてアオリストと過去という、この言語が所有する二つの時制に従って変化する。しかし後に見るように、これらは我々が持っている時制の区別というものに完全に対応するものではない (ibid. p.46)。

.....

サモジー諸語¹においてはすべての種類の動詞に共通の二つの時制しか区別しない。これらの言語で過去時と呼ばれているものはその内容からアスペクトに近いニュアンスを持っている。もう一つの時制であるアオリストとは反対に、それは遙か以前に生じたかあるいは遙か以前に生じつつあった行為を伝える。従って過去時は体験される行為の過程という内容を失う。それは既に終わった行為である。一方過去に生じた事件を行為の過程において観察する際には、通常アオリストが用いられる。それはそれ自身いかなる時間的な内容も持たない。例えばネネツ語の *вэсако тым хада* 「老人・鹿を・殺した」、*тым хада-м* 「鹿を・殺した・私が」などである。これらの例に見られる動詞 (*хада*, *хада-м*) は「殺す」という意味にも、「殺しつつある」及び「殺そう」の意味にも用いられる。この場合時間的意味は、現在も未来も表すことのできるアオリストそのものによってではなく、文脈全体あるいはこれに伴われる時間の副詞によって伝えられ

¹サモジー諸語はシベリアに住む少数民族ネネツ、エネツ、ンガナサン、セリクブの言語がこれに属している。

るのである [35, pp.76-77]。

§11 彼がここで考えているのは、これがアスペクトの相違だということであろう。もし汎時的な「アオリスト」が完了・未完了を表す「過去形」の析出によって、現在時的なはたらきをするようになったとすれば、印欧語の場合とは丁度逆の動き方をしたということになる。

事実、アオリストは古典ギリシア語においても、未だ汎時的な意味で広範な使用を見ていたことが報告されている [21, pp.431-433],[53, pp.332-335]。いわゆるグノーミック・アオリストは有名であるが、スミスによればこれを含めてアオリストには次のような使用が見られるという。

- (1) 経験のアオリスト *empiric aorist*. 「しばしば」、「いつも」、「時々」、「既に」「未だ」、「決して」などの副詞を伴って経験される事実を表すとされるもの。

例えば、

πολλοί πολλάκις μειζόνων ἐπιθυμοῦντες τὰ πορόντ' ἀπώλεσαν. 「多くの人々はより大きなものを望んで持っているものをしばしば失うものだ。」

- (2) 諺のアオリスト *gnomic aorist*. 一般的真理を表すとされるもの。例えば

χάλλος μὲν γὰρ χρόνος ἀνῆλωσεν ἢ νοσος ἐμάρανε. 「美は時間が損なうかあるいは病が萎れさせるものだ。」

- (3) 反復のアオリスト *iterative aorist*. 反復される行為を表すもの。ἀνを伴う。

例えば、

εἶπεν ἄν 「彼はいつも言うのだ」

- (4) 比喩のアオリスト *aorist in similes*. 詞において比喩として使われるもの。例えば、

例えば、

ῥιπε δ' ὥς ὅτε τις δρυὺς ῥιπεν. 「彼は樅木のように倒れた。」

- (5) 未来を表すアオリスト *aorist for future*. 未来のことを生き生きと表す場合。

例えば

ἀπωλόμην ἄρ', εἰ με δὴ λείψεις. 「もしお前が私を見捨てるならば、私は死んでしまうだろう。」

- (6) 現在を表すアオリスト aorist for present. τί οὖν οὐ または τί οὐ を伴って驚きを表し「どうしてしてくれないのか」という意味を表す場合。例えば、
τί οὖν οὐχί καὶ σὺ ἐπέμνησάς με· どうしてお前は私に言ってくれないのだ。」

- (7) 現在完了を表すアオリスト。過去の行為の結果としての現在の状態を表すもの。例えば、

παρεχάλεσα ὑμᾶς, ἄνδρες φίλοι. 友よ、私があなた方を呼んだのだ。

§12 これはたぶんに感覚的な推論であって客観的なものとはいえないが、語根のみからできた単純な動詞形式が、機能的に行為概念そのものを表し、従って汎時的に使用される傾向が広く見られるように思われる。アオリストもそういう形式である。例えばスワヒリ語においても、近年その使用の範囲が制限されているといわれるが、例えば、

na-soma	I read	twa-soma	we read
wasoma	thou readst	mwa-soma	you read
a-soma	he reads	wa-soma	they read

のような単純な形に対して発話の時に行為が行われることを示すアスペクトの形がいわゆる現在形として用いられるという。即ち、

ni-na-soma	I am reading	tu-na-soma	we are reading
u-na-soma	thou art reading	m-na-soma	you are reading
a-na-soma	he is reading	wa-na-soma	they are reading

ラテン語は動詞の人称語尾に一次語尾を持たないが、この場合にも語根 *es-の母音度零の形が、現在の意味に用いられていることはよく知られている。1人称現在 sum < *s-om、1人称複数 sumus < *s-mos?, 3人称複数 sunt < *s-ont である。fer- < *bher- 「運ぶ」もテマティック、アテマティックの語尾をもって現在形として用いられている。アテマティックの形は fers, fert, fertis などである。この語根の母音度は e 階梯と思われるが、語幹形成要素を伴わずに、直接人称語尾と接続していることからみて、メシチャーニーノフのいうアオリストであると考えるべきであろう。

- §13 ラテン語の時制に関してはトロンスキーは次のように述べている。

例えば時制体系の発達(少なくともその完全な形においては)、アスペクトの形成

よりも遅い段階に属する。このことは形態論において明らかに認められる。時制の標識はより古いアスペクトの語根に付加されている。ギリシア語やサンスクリットのような言語では法はアスペクトの内部においてのみ作られ、それに続く時制の分化は主として直説法に関わるものであった。比較文法が明らかにするところでは、時制の形成においてはかなりの相違がみられるものの、アスペクトの形成方法に関しては印欧諸語は互いに極めて類似している [40, p.40]。

§14 ネネツ語と同じように名詞がそのまま述語として用いられた事態が、印欧語の古い時代に存在していたと考える研究者も多い。

例えばウオトキンスは次のように述べている。はじめ *nek^wt-「夜」が述語として「夜である」の意味に使われるようになる。この場合初原的には *nek^wt- は人称に関係なく、ゼロ語尾を取っていたとされる。*nek^wt- $\emptyset$ である [26, p.49 & seq.]. しかしやがて *-t- を持たない語根 *nek^w- と対比されるようになって *nek^w-t- $\emptyset$ のように考えられ、*-t が語尾として析出して来るといのである。

しかしこれには疑問もある。なぜなら *-t- は所謂「拡張子」*élargissement* であるが、拡張子は何も *-t- に限られている訳ではないからである。*-t が語尾として定着するためには、何かもっと外の条件も必要とされるのではなかろうか。

§15 序でといっは語弊があるが、印欧語の動詞の変化においてなぜ常に人称を表す要素 (人称語尾) が、常に時制を示すと目される要素の後に立つのかは、明らかにしておかねばならない問題である。

なぜならば、例えば人称を表す要素が語根に直接後続するアオリストが発生した時期には、この形は未だ特定の時制を表すものでなく、その後になって時制の区別が生じたのだというならば、既に語幹に直接接続していた時制の区別を特定する要素が、なぜ人称語尾の前に割り込んだかということについては、少なくとも理論的に説明されねばならないだろうからである。むしろ人称を示す要素に後置されるという順序の方が、少なくとも理論的には自然だと思われるのは、印欧語の第一語尾を構成する要素 *-i が人称を表す要素に後置されていることに徴しても明らかであろう。

§16 これに関してメシチャニーノフは、興味ある見解を述べている。彼が考察

の対象としているネネツその他の言語の場合にも、時称を表すというよりもむしろアスペクトを表すとされる要素が、人称を表す要素の前におかれるからである。

……文法形式から判断すれば、それ (sc. アオリスト) は時間の関係を表すものとは考えられない、形式的にもそれは名詞述語の構成と全く変わりがない。サモジー諸語のアオリストは人称語尾を動詞語幹に付加することによって作られる。同じ語尾を名詞語幹に付加すれば名詞述語のアオリスト形が作られる。アオリストはアスペクトが異なる動詞を作ることもできる。例えばネネツ語の *намда* は「聞こえる」という動詞語幹である。人称語尾をつければアオリストの形 *намда-в* 「私は聞く」。「私は聞いた」が得られる。

アスペクトは接辞によって作られ、新しい、すでに変化した語幹が得られる。例えば常態的な行為を表す新しい動詞 *намда-сети* が、もとの動詞から作られる。*намда-сети-в* 「私はいつも聞いていた」など。

付加することによってサモジー諸語においてアオリストと呼ばれるものを形成する人称語尾は実際には、名詞であれ動詞であれ語を述語化するものに他ならない。

ここから次の結論に至るのは容易である。サモジー諸語においてアオリストと呼ばれるものは述語のカテゴリーに他ならないのであって、動詞のカテゴリーに属するものではない。従ってこれは動詞のカテゴリーに属する時制ではない。すなわち動詞がそれを取るとしても、専ら動詞の形式だという訳ではない [35, p.78]。

§17 以上引用した箇所において著者が主張しようとしていることは明らかである。人称語尾と見えるものは実は動詞を構成するために付加されたものではなく、それが文の述語であることを示すものに過ぎないというのである。そうすればこれは述語に立つものに文の中において付けられる、謂わばシンタックスのレベルのものだということになる。そうだとすれば、専ら動詞に接続し、アスペクトを表す要素が常に人称を表す要素の前に付くというのは当然のこととなろう。

しかし同時にメシチャニーノフは、アスペクトを表わす要素と事象を表わす要素を区別し、サモジー諸語においては、時称を表す要素が人称を表す要素の後に付く

ことをも指摘している。

研究者たちがサモジ語において取り出したこの種のタイプの過去形は、結局のところアスペク的な変種に帰属せしめることができよう。もし一つの形式的な側面、すなわちサモジ語においてはアスペクトの接尾辞が人称語尾に先行するということ、このことを妨げない限りは。

このようにしてそれら (sc. アスペクト接尾辞) は語幹を形成し、それに述語の標識すなわちアオリストを作る人称語尾が付加されるのである。これに対して過去時を表す標識はそれらの後に続く。それ (sc. 過去の標識) はその後の発展としてアオリストの末尾について、新しいカテゴリーを形成することになる。

一方アスペクトは我々の分析する構成のもととなるアオリスト並びにそれに続く過去時称という、動詞語幹の発達を導く。ネネツ語の未開始の行為を表すアスペクト (標識は *-нэгү*) *мада-нэгү-м* 「私は (これから) 切るぞ」を参照。ここで人称語尾 *-м* はアスペクトの標識の後に立ち、過去時の形 (標識は *-үө, -эө*) *мада-м-эө* となる。この場合この時称の標識 *-эө* は人称の標識の後に置かれるのである (ibid. pp.79-80)。

§18 この様な現象が生じるとすればサモジ語の場合、時制が発達するに至ったのは人称語尾がシンタックスのレベルのものでなくなり、動詞の一部になって以後ということになるのであろうか。ひるがえって印欧語の場合、先に述べた要素 **i* を除けば、人称語尾に先行する時制表示要素は、はじめは専らアスペクトに関わるものであって、後になって時称を表すものに転化したものか、あるいは人称語尾が未だシンタックスのレベルの要素であるときにすでに時称を表すものであったかの何れかでなければならない。しかしこれは **i* が付加されて二次語尾が発生した時点の時制の始まりとすることと矛盾する。また多くの印欧語が時制とアスペクトの縋い交ぜになった時制形式を持っていることに対しても説明が難しい。そう考えれば、印欧語の場合 **i* の存在の有無によって時制を大きく二分することができたために、サモジ語のように人称語尾の後に時称を表す接尾辞が付加されることがなくなったという解釈も可能であろう。いずれにしてもこの問題は未解決という外はない。

III. 所謂 infixe nasale について

§19 印欧語には所謂接中辞 $*-n-$ が古くから知られているが、一般に接尾辞、接頭辞が主である印欧語に関してこの唯一の接中辞の存在は奇異なものに思われていた。これはバンヴニストが語根の構造についての記述で明らかにしたものであるが、この鼻音接中辞は、特定の語根の構造における転置 metathesis として現れるという。即ち、印欧語の語根は、(1) 完全階段の母音度をもつ語根 + 拡張子 $C_1éC_2 - C_3$ 、(2) ゼロ階段の母音度をもつ語根 + 完全階段の母音度をもつ拡張子 $C_1C_2 - éC_3$ の形をもつ。この第二の形は更に接尾辞 C_4 を伴うことがあるが、この C_4 が $*n$ であるとき、metathesis を生じて、 $C_1C_2 - n - éC_3$ となるというのである [25, p.24][3, pp.159-161, 170-171]。

ソシュールははじめ $Skr \acute{s}r\acute{n}óti < *kl-ne-u-ti$ 「彼は聞く」、 $< *kl-u-$ 、 $Skr yunákti < *ju-ne-g-ti$ 「繋ぐ」 $< *ju-g-$ 、 $Skr punáti < *pu-ne\grave{a}$ 「清める」 $< *pu-\grave{a}$ のように $*-ne/o-$ の形を考えていたようである。しかしこれが metathesis の結果であるとすれば、この「接中辞」に母音交替を認めるのは妥当ではないと思われる。

§20 事実シュトゥルンクはこれらを $*kl-n-eu-ti$ 、 $*ju-n-eg-ti$ 、 $*pu-n-e\grave{a}-ti$ 、 $d^m-n-\grave{a}_2-ti$ のようにしている [22, p.26]。 $*kl-n-eu-ti$ はサンスクリットでは「聞く」の3人称単数現在 $\acute{s}r\acute{n}óti$ 「彼は聞く」であり、これに対するアオリストは $*e-kl-eu-t < \acute{a}sr\acute{o}t$ 「彼は聞いた」である。前者が所謂一次語尾をもつものに対して後者が二次語尾を持つことを除けば、両者の違いは偏に $*-n-$ が存在するか否かにかかっている。所謂 augmentum $*e-$ は過去を示す指標と考えられているが、これは印欧語の古形を示す injunctivum には欠如していること、並びにヴェーダ、サンスクリットのようなインド語派、ギリシア語、アルメニア語などの、限定された語群に一般化しているに過ぎないことを勘案すれば、現在形、アオリスト形の両者を分かつものはこの infixe nasale の他にないということができよう。

§21 更にこの関係はヴェーダの命令法現在 $\acute{s}r-n-u-dhi$ ($\acute{s}r-n-hí$) に対する命令法アオリスト $\nabla ed. \acute{s}r-u-dhí$ も見られるという (ibid. p.29)。

以上のことからシュトゥルンクは次のように結論づける。

このような古期の形態論的關係が意味するのは、ソシュールが考えたように、語根

の完全階梯 II の形態素が鼻音の現在形のプロトタイプを決定づける形態素 *-n-* の完全階梯だというのではなく、かつて鼻音現在と語根アオリストの間に特別な親近性が存在していたに違いないということである (ibid.)。

引用したシュトゥルンクの論文はこのように **-n-* のみによって異なる形式が、彼の言う prototype であるか否か、また同一の言語の内部ではなくとも、その痕跡が存在するか否かを論じようとした、極めて意欲的なものである。

もしこれが正しいとするならば、その初原的な意味は別にして、**-n-* という標識をもつ有標的なものが、これを持たない無標的な形式から分離し、やがて現在時を表すようになったと考えるのは極めて論理的なことであろう。また一方 **-n-* を持たない形式が所謂二次語尾を持ち、語根の形式から見ても零階梯の母音度を持っているとすれば、いわば語根の示す意義の他いかなる余計な要素も持っていない「純粋に」行為そのものを表すと考えるのが自然であろう。

これに対して **-n-* はスワヒリ語の現在の接辞 *-na-* を考え合わせれば、感覚的に過程性を表すものと考えられることもできそうである。そしてもし過程性が話者の眼前において生起する事件を表現することと結びつくとすれば、これがやがて現在時の指標に転化することは十分に可能なことと思量せられる。

再びもしそうとすれば、そのために汎時的に使用され得たこの「アオリスト形」が現在形の析出によって過去時の行為を表すようになったと考えるのも、理に叶っている。もしそうとすれば、これは **-n-* を持つ形が一次語尾を取るに至った時期と、時間的にほぼ一致するのではあるまいか。

§22 このように両者ともアテマティックな形をもつ純粋の prototype を保持しているものの他に、アオリストにおいては古形の語根アオリストを持っていたものの、現在形は既にアテマティックな形を持つに至ったものの存在も認められるという (ibid. p.33)。

mu-ñ-cá-ti	:	á-muca-t	>	*e-muk-et	「解放する」
li-m-pá-ti	:	a-li-pa-t	>	*e-lik ^w -et	「塗る、汚す」
kɿ-n-t	:	á-kɿta-t	>	*e-kɿt-et	「切る」
si-ñ-cá-ti	:	á-sica-t	>	*e-sik ^w -et	「そそぐ」

IV. いわゆる Injunctive について

§23 injunctive という用語をはじめて用いたのはカール・ブルックマンであったといわれる [11, p.27]。はじめ彼はこれによってヴェーダなどに見える augmentum を持たず、直説法的な使用をしない形式を指そうとしたとされるが、他の法や時制との関係についてさまざまな規定の仕方が起こったとされる。ホフマンはこの用語を定義して「(augmentum を欠き二次語尾を持つという) 一定の特徴によって特徴づけられ、一定の機能を持つ統一的な語形式であって、ひとつの文法的カテゴリーである」とする。

Sie besagt, dass mit "Injunktiv" eine grammatische Kategorie bezeichnet wird, d.h. eine einheitliche, durch bestimmte Charakteristika (Augmentlosigkeit, Sekundärendung) gekennzeichnete Formbildung mit bestimmten Funktionen [11, p.28]

更に彼はこの「語形式」について、これが異なる時制を持っているので、直説法、接続法などと並ぶ法を構成していると主張する。

Der Injunktiv wird vom Präsens- Aorist- und Perfektstamm aus gebildet. Damit steht er auf einer Linie mit der Bildung von Indikativ, Konjunktiv, Optativ und Imperativ (ibid. p.29).

§24 injunctive については、一方ではかなり冷淡な見方もある、例えばセメレニイはこれを「独立した形式ではなく、せいぜいこの名前の下に古い augment を持たない過去の形を持って来ることができるというにすぎない」という。

Against the view that the injunctive is a grammatical category like the indic., subj., etc., it cannot be emphasized too often that in the Indic system the injunctive is not an independent category; one can at most bring together under this name certain uses of the old unaugmented preterite forms [23, pp.263-264].

筆者はサンスクリットについては暗いので、これらの議論に立ち入ることはできないが、セメレニイを含めてこの形式が極めて古いものであると考える研究者は多いと思われる。

§25 セメレニイに代表されるような injunctive に対する否定的な見方は、近年少しずつ変わってきているように思われる。そしてそれはロシアにおける内容的類型学的な研究と軌を一にしているように思われる。これは両者が時期的に大凡一致しているというだけではなく、内容類型学によって、従来の言語観が根底的な変容を余儀なくされ、言語というものが極めて質の異なる世界の構築の仕方を許容し、それが一定の段階を追って変化するものであるという認識に理論的基礎を与えたこと、極めて古い発展段階にある言語が最初から法や時制を持っていたという想定が極めて疑わしいものだと考えられるようになったことなどがその背景であると考えられる。

§26 この間の事情をよく表すものとしてイヴァーノフの次のような所説がある。少し長いが敢えて茲に引用することにしたい。

95 年前にトゥルネイゼンによって述べられ、やっと現在広く受け入れられるようになったのは、injunctive が、一方では古代の法の諸形式の源であったということと (特に命令法として利用される—特にリグヴェーダにおいて禁止の *mā* を伴って injunctive と共に用いられる特徴的な利用を参照のこと。Hoffmann 1967, p.43, p.45)、他方では古代インド語のような諸方言における過去の諸形の源であったという考えが、時間と法のカテゴリーが初原的にはひとつのものであったという考えに導くということである。共時的な観点からすれば、ヴェーダの言語及びガーサ、アヴェスタの言語において (augment を持たずに二次語尾をもった) injunctive の諸形が過去時において (*Veda réjad bhūmīḥ* 「大地が揺れた」 RV IV, 17, 2; Avesta *kə mā tašaṭ* 「誰が私を創ったのか」, Y.29, I)、あるいはまた法において (*Veda śúdsnam pári pradakṣiṇíd ví śiśnathaḥ* 「シュシナは自らの右手ですべての生けるもののために滅ぼせ」 RV X, 22, 14; Avesta *āxsō vaṇhəuš ašā ištīm manago* 「私の良き考えの力を見よ」) 用いられ、同時に injunctive を一般的現在時としても用いることが可能であった。Kuryłowicz 1925; 1964, p.146; Renou 1928; Barrow 1976, p.279,280; Hoffmann 1967)。従って injunctive には、後に imperfect, aorist および一連の特殊がカテゴリーに発展した、印欧語動詞の古形の残余が遺されているという仮説が可能になると思われる (Ivanov-Toporov 1960, p.115; Ivanov 1965, p.136,137)。

この仮説が提起された直後にウォトキンスはこれを評して次のように書いている。イヴァーノフとトポロフは、……injunctive は直説法の体系の全体、現在、未完了過去、及びアオリストの祖形であると考えている。彼らが初原的には動詞における時制の対立は欠如していたと主張しているのは疑いもなく正しい [29, p34]。

§27 ウォトキンスはこれに続けて次のように主張するが、この点についてはイヴァーノフの批判がある。

しかし完了形が存在していたことは、この体系に少なくともひとつのアスペクトの相関関係が存在していたことを予想させる。従って私は現在とアオリストが初原的に同じものだったと保証することはできないであろう。したがって完了性に関する相関関係は、少なくとも再構成が可能な時間的に最も遠い時期の体系において若干の形式に存在していたと私は考える。アスペクトに関して中立化した injunctive の現在はアスペクトに関して有標的な injunctive の存在を否定するものではなく、ヴェーダの言語においても現在語幹から作られた injunctive と殆ど同じだけ、アオリスト語幹から作られた injunctive が存在していたことを否定するものでもない (Watkins 1962, p.113, Note 3)。

§28 イヴァーノフの批判というのは、「アスペクトの対立」が仮に存在していたとしても、それによって現在とアオリストが初原的に同じものだというわけではなく、体系的に相異なるカテゴリーとして区別されていた訳ではないという意味で、アスペクトの対立という点でもともと異なる形式であったと主張するものではない、という点に関してであった。

しかしこれに関連してウォトキンスが言及したルヌーの統計 (Renou 1928) は、「極めてしばしば injunctive は現在及びアオリストという、特別な形式的特徴を持たない語幹を持つ」 (Елизаренкова 1960, p.51) のであるから、別の解釈を許容することになる。mā を持つヴェーダに特徴的な構文に関して (はじめて『リグ・ヴェーダ』の言語の研究に統計的手法を用いた) ホイットニーは、既に injunctive はこの構文において主としてアオリスト的な性格を持っている、と述べている (未完了過去の形、即ち非アオリスト的な語幹に対する比率は『リグヴェーダ』において 5:1、『アハルヴァヴェー

ダ』において 6:1 の水準にある。Whitney 1962, p.218 § 579a)。こればウォトキンスの主張と異なっている。

§29 以上のような議論は「アスペクト」の対立が印欧語に初原的なものではなかったとする、ガムクレリゼとイヴァーノフによる内容的類型学に基づいた印欧比較言語学の全面的な見直しと深く関わっているといえよう。その前提となったのは、ソシュールに端を発しクリロヴィチによって最初に体系化されたいわゆるラリンガル理論であった。

ガムクレリゼ・イヴァーノフは印欧祖語がいわゆる活格言語であったとし、生き物についての述語として立つ動詞の *-m(i), *-s(i), *-t(i) を語尾とする変化に対して、不活性の状態・属性を表す述語として用いられる *-Ha を語尾とする動詞形を考え、完了形はこの *-Ha の形式から発生したと考えている。したがって完了形は後代の言語から推測されるような、特定のアスペクトの乗興ではなかったということになる [30, I, p.293 & seq.]。

§30 セメレニイが法としての *injunctive* の存在には極めて懐疑的であることは既に述べたが、彼はこの問題を論じる際に役に立つかも知れないとすれば、それはギリシア語の事実だけだと述べている [23, p.263]。体系的に *augmentum* が用いられているのが梵語を除けばギリシア語だけだからである。確かに二次語尾を持ち、*augmentum* を備えているという条件だけがこの形式を他から区別できるとすれば、*augmentum* を持たない言語は、この問題に限っては役に立たないと思われる。

一方シャントレーヌによれば、ホメーロスの言語においては、*augmentum* の使用は詩の韻律その他の条件に左右され、かなり自由であったことが述べられている [6, t.i, pp.479-484]。

これらのことから導かれるのは、もし *augmentum* の有無を考慮に入れなければ、アオリストあるいは未完了過去などの語幹に等しい母音度を持ち二次語尾を伴う形式の全体について、その使用の時制的性格を洗い直すことが必要となるということではあるまいか。それまではこの問題について何らかの決定的なことを述べることはできないように思われるのである。

§31 それにも拘わらず、*augmentum* の使用がもしかかなり自由であるとすれば、

そして現在語幹の標識として今回は *-n- の要素に限ったが²、その他の現在語幹の標識と母音度を持っているものが、もしその一点だけでアオリストあるいは未完了過去と異なった意義に用いられることがあったとすれば、それも時間の観念の発生のひとつの証拠となりうるかも知れないと考えられる。

V. 終わりにあたって

内容的類型学の出現以来、これまで分からないままに過ごしてきたことがら、乃至は分からないことすらも分からないままであった事柄が、少しずつではあるが解明されつつある。しかしそれと引き替えに突如目の前に広大な未知の世界が出現して、どうして進めばよいかと途方に暮れる気がしているのも否めないところである。それでも案内知った土地ではなく、Terra incognita をコンパスも持たずに歩きまわり、あげくの果てに道に迷うというのも、何かわくわくと心躍るような気持ちになることは確かである。道半ばとはいうが、歩き始めて間もなく倒れるのは分かり切っていても、若い人々の後ろにくっつきながら、邪魔だと思われてもなお進んでみたくなるのも、また人の性であろう。面倒を厭わずつきあって下さる方々に感謝するばかりである。

²印欧語の接中辞が *-n- だけに限らないとする主張も Karstien によってなされている。彼の主張は接中辞がただ一つしか認められないのは体系として容認しがたいとするものである。体系の観点からすれば接中辞を認めず、これを接尾辞の metathesis であるとするか、それとも複数の接中辞をみとめるかである。しかし本来接尾辞だったとすれば、初原的な語根として非常に短いものを認めなくてはならないから、非現実的であり、従って複数の接中辞を認めるべきだという。その当否は別にして時制と関わる可能性のあるものとしては、現在の所 *-n- のみのように思われる [15]。

関係文献

- [1] Charles E. Bennett
Syntax of Early Latin, Hildelsheim, Germany 1966. Rep. from the original,
Boston 1914, 1-3.
- [2] Herbert Bräuer
Slavische Sprachwissenschaft, I-III, Berlin 1961-1969.
- [3] Émil Benveniste
Origines de la formation des noms en indoeuropéen, Paris 1935.
- [4] Karl Brugmann
Beiträgen zur Conjugationslehre Morphologische Untersuchungen, III, 1880.
- [5] Thomas Burrow (1909-)
The Sanskrit Language, London, 1976.
- [6] Pierre Chantraine
Grammaire homérique, Paris t.1.1958, t.2 1965.
- [7] Pierre Chantraine
Morphologie historique du grec, Deuxième édition, Paris 1967.
- [8] W. Cowgill
More evidence for Indo-Hittite: the Tense-Aspect system. *Proceedings of
the Eleventh International congress of linguists*. L. Heilmann ed. II. Bologna,
1975, pp.557-570.
- [9] W. Cowgill
Anatolian *hi*-Conjugation and Indo-European perfect. Instalment II. *HI*
pp.25-39.
- [10] Hermann Hirt
Handbuch des Urgermanischen Teil I, Heidelberg 1931, Teil II, Heidelberg
1934.

-
- [11] Karl Hoffmann (1915-)
Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung, Heidelberg 1967.
- [12] Wilhelm von Humboldt
Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, 1836.
- [13] J. H. Jasanoff
The position of hi-conjugation, *HI*, pp.79-90.
- [14] Jens Otto Harry Jespersen
Tid og Tempus. Fortsatte logisk-grammatisk studier. 邦訳:『オットー・イエスパーセン 時間と時制 (TID OG TEMPUS)』齊藤 静 山口 秀夫共訳
東京 篠崎書林 1956.
- [15] Hans Karstien
Infixe im Indogermanischen. Indogermanische Bibliothek, Dritte Reihe, Heidelberg 1971.
- [16] Jerzy Kuryłowicz (1895-1978)
Injonctif et subjonctif dans les Gāthās de l'Avesta. *Rocznik Orientalistyczny*, t. III, Lwów 1925.
- [17] Jerzy Kuryłowicz
The inflectional categories of Indo-European. Heidelberg 1964.
- [18] Wolfgang Meid (1929-)
Der Archaismus des Hethitischen, *HI*, pp.159-176.
- [19] Antoine Meillet
Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, Paris 1964.
- [20] Louis Renou (1896-1966)
Les formes dites d'injonctif dans le R̥gveda. *Étrennes de linguistique offertes par quelques amis à Emile Benveniste*, Paris 1928.

-
- [21] Herbert Weir Smyth
Greek Grammar, Harvard University Press, 1971.
- [22] Klaus Strunk
Nasalpräsentien und Aoriste Ein Beitrag zur Morphologie des Verbums in Indo-Iranischen und Griechischen, Indogermanische Bibliothek, Dritte Reihe, Heidelberg 1967..
- [23] Oswald J. L. Szemerényi
Introduction to Indo-european linguistics, Oxford 1996.
- [24] Rudolf Thurneysen (1857-1940)
Der Indogermanische Imperativ, *KZ* 1885, Bd. 27, pp.172-180.
- [25] Calvert Watkins (1933-)
Indo-European origins of the Celtic verb. I. The sigmatic aorist. Dublin 1962.
- [26] Calvert Watkins (1933-)
Indogermanische Grammatik, Heidelberg 1969.
- [27] William Dwight Whitney (1827-1894)
Sanscrit Grammar, Delhi 1962.
- [28] Леон Арсеньевич Булаховский
Исторический комментарий к русскому литературному языку, пы-
атое, дополненное и переработанное, Киев 1958. Rep. Leipzig 1974.
- [29] Вячеслав Всеславич Иванов (1929-)
*Славянский, балтийский и раннебалканский глагол. Индоевропейские
истоки*, Москва 1981.
- [30] Тамаз Валерианович Гамкрелидзе & Вячеслав Всеволодович
Иванов
*Индоевропейский язык и индоевропейцы, Реконструкция и историко-
типологический анализ праязыка и протокультуры*, I-II, Тбилиси
1984.

- [31] Татьяна Яковлевна Елизаренкова (1929-)
Аорист в «Ригведе», Москва 1960.
- [32] Георгий Андреевич Климов
Очерк общей теории эргативности, М. 1973.
- [33] Георгий Андреевич Климов
Типология языков активного строя, М. 1977.
- [34] Георгий Андреевич Климов
Принципы контенсивной типологии, М. 1983.
- [35] Иван Иванович Мещанинов (1883-1967)
Глагол, М.-Л. 1949, Переиздан. Л. 1982.
- [36] Илья Аронович Перельмутер (1929-)
Общеиндоевропейский и греческий глагол, Ленинград 1977.
- [37] Михаил Николаевич Петерсон
Очерк литовского языка, М. 1955.
- [38] Александр Афанасьевич Потебня
Из записок по русской грамматике, Том I-II, М. 1958, III, М. 1968, IV, М. 1977.
- [39] Иосиф Моисеевич Тронский
Историческая грамматика латинского языка, М. 1960.
- [40] Иосиф Моисеевич Тронский
Очерки из истории латинского языка, М.-Л. 1953.
- [41] Макс Фасмер
Этимологический словарь русского языка, 1-4, Перевод и дополнения
О. И. Трубачева, М. 1971.
- [42] G. A. クリモフ, 石田修一訳
『新しい言語類型学, 活格構造言語とは何か』三省堂 1999.
- [43] 高津春繁
『印欧語比較文法』岩波全書 187, 岩波書店 1954.

- [44] 高津春繁
『言語学概論』有精堂 1957.
- [45] フェルディナン・ド・ソシュール
小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店 1952.
- [46] 田中美知太郎, 松平千秋
『ギリシア語入門』改訂版, 岩波全書 137, 岩波書店 2000.
- [47] フンボルト
亀山健吉『フンボルト 文人・政治家・言語学者』中公新書 525, 1978.
- [48] フンボルト,
亀山健吉訳『言語と精神』, 法政大学出版局 1984.
- [49] 細江逸記
『動詞時制の研究』, 泰文堂, 初版 昭和 7 年, 8 版 昭和 30 年.
- [50] 山口巖
『類型学序説』京都大学学術出版会 1995.
- [51] 山口巖
『人とことば』鳥取環境大学 2004 年講義ノート 鳥取環境大学.
- [52] 山口巖『ことばの構造とことばの論理』日本古代ロシア研究会 1998.
- [53] 山口巖『ロシア文法の周辺—一般言語学への招待』日本古代ロシア研究会 2005.
- [54] 渡辺慧
『時間』白日書院 1948.
- [55] 渡辺慧
『時』河出書房新社 1974.
- [56] 渡辺慧
『認識とパタン』岩波新書 岩波書店 1978.